

「核のない世界へ 広島メキシコ友好壁画」

実行委員会



原爆投下80年プロジェクト:「核のない世界へ 広島メキシコ友好壁画」

広島空港・東側増築部

2025年10月15日完成

デザイン・制作: アドリー・デル・ロシオ / カルロス・アルベルト GH

企画提案・実行責任者: グティエレス一郎(本文作成) / グティエレス実



*両方の壁画の写真を平面にした壁画の全体像 (Carlos Alberto GH)

◆全般的な構想◆

●「核のない世界へ 広島メキシコ友好壁画」壁画は、広島県とメキシコ・グアナファト州の 2014 年の友好提携を機に、広島とメキシコが長年育んできた温かい友好関係と、核兵器のない世界に向けた共通の願いを体現する作品です。グティエレス一郎およびグティエレス実が企画提案・実施し、メキシコ人壁画家姉弟のアドリー・デル・ロシオ氏およびカルロス・アルベルト GH 氏が、デザイン・壁画制作を行いました。

●壁画の企画者およびメキシコ人壁画家姉弟は、原爆投下から 80 年が経ち、被爆一世の方々から直接お話を伺う貴重な時間が限られている現状を強く意識し、被爆者への深い敬愛を込めた作品を目指しました。したがって、壁画には「原爆で亡くなった被爆者の記憶を忘れない」、そして「生涯に渡って証言をされた被爆者の意志を継承する」誓いが込められています。この内容の壁画をメキシコ人アーティストが描くことにより、広島、長崎や日本を超えて、人類全体が共有すべき普遍的な価値を持つものとして、その重要性を高らかに宣言する作品として世に送り出す考えです。

●広島県と共に、メキシコは世界の非核化を推進すべく精力的に活動してきた国でもあります。本壁画の最大のハイライトとして、核廃絶への功績が評価され両国でノーベル平和賞を受賞した、メキシコ人外交官アルフォンソ・ガルシア・ロブレス氏、および日本被団協を代表して、結成時の中心人物であり、長年にわたり被爆者支援と核兵器廃絶を訴え続けた森滝市郎氏と山口仙二氏を描きます。また、空港正面では「原爆の子の像」モデル、佐々木禎子さんの肖像が旅行客を迎えます。

●壁画制作に向け、壁画家姉弟は、メキシコ在住被爆者の山下泰昭氏(長崎出身)から被爆証言を聞き、七宝作家で被爆者の田中稔子氏(広島出身)からは証言と作品の助言をいただきました。

「核のない世界へ 広島メキシコ友好壁画」

実行委員会



◆特定できる人物◆



北面(空港正面)

●折り鶴を見上げている右側の女の子は平和公園の「原爆の子の像」のモデルでもある佐々木禎子さんの肖像です。



東面

●大きく描かれている3人の人物のうち、右側に横顔で描かれている人物はメキシコ人のノーベル平和賞受賞者のガルシア・ロブレスです。世界初の非核地帯条約である1968年発効の「トラテロルコ条約」を主導した人物です。

●本壁画は、2024年にノーベル平和賞を受賞した日本被団協のご賛同もいただき、「広島と長崎の被爆者の象徴として、ぜひとも森滝市郎さんと山口仙二さんを描いてほしい」という大変名誉なご依頼を頂戴いたしました。私ども企画者および壁画家姉弟は、このご依頼を心より光栄に受け止め、森滝市郎氏と山口仙二氏の核廃絶を求める強い遺志が壁画を通じて日本そして世界の人々に永く語り継がれていくことを願い、使命感と最大の敬意を込めて制作いたしました。

「核のない世界へ 広島メキシコ友好壁画」

実行委員会



◆北面・空港正面◆

●正面から見える北面には、広島のシンボルとして、佐々木禎子さんと原爆ドーム、慰靈碑と平和の灯を描いて、空港の旅行者を迎えるというイメージになってます。(建物は実際の配置とは少し違いますが、ここではコラージュ的にシンボルとして描いています。)

●佐々木禎子さんと共に描かれている人々は、生涯に渡って被爆証言活動を行った多くの被爆者に敬意を込めたイメージです。被爆一世の方々が残してくれた被爆証言を語り継ぐ意志も示しています。壁画を制作したアドリーさんは、被爆者に対して、「彼ら彼女らは平和のために尽力した眞の英雄。心から光を放ち、証言を聞いた多くの人の心を動かしてきた。彼ら彼女らは(希望の)光の存在。」と話しており、そのように表現しています。アドリーさんは、被爆者から「深い生命への愛を学んだ」とも話しています。

●北面も含め、この壁画では、佐々木禎子さんの物語で世界に広まった平和の象徴であり、日本被団協のロゴマークでも使用されている折鶴を一つのモチーフにしています。

●壁画では、折鶴だけでなく生きた鶴をモチーフとして使い、「人類全体としての長寿・末永い存続」の意味を込めています。これは、西洋の鳩が表す「平和・和解」に留まらず、核廃絶を成し遂げ、人類の存続が恒久的に脅かされない状態を願うため、「人類全体の長寿・末永い存続」という願いを鶴に託したものです。壁画に描かれている森滝市郎氏の「人類は生きねばならぬ」という言葉とも重ね、鶴を「末永い人類の存続」の象徴として用いているのです。

●平和の灯は、「世界で核兵器がなくなるまで燃え続ける」とされてますが、ここでは人類がいざれ核廃絶を成し遂げたときに火が消えて、初めて「人類の末永い存続」の道が開けるという意味合いで鶴が舞い上がる表現になっています。

●同じく、鶴を抱きしめている被爆者の方は「核を廃絶し、人類の末永い存続」を希求する被爆者の願いを表しています。

「核のない世界へ 広島メキシコ友好壁画」

実行委員会



◆東面◆

- 東面の下にいる子ども達などは、原爆投下当時かその直後に亡くなった被爆者をモチーフにしています。亡くなった被爆者が、我々の記憶の中では今も生きており、さらに生きている我々に核のない世界を実現する希望を託しているというような位置づけで描いています。
- メイン人物の下には、広島県と友好提携するメキシコのグアナファト州を象徴する先住民オトミ族の女の子が描かれています。彼女が持つカエルの折り紙は、同州を代表するモチーフであり、友好提携10周年(2024年)を記念してグアナファト州から広島県庁に寄贈・設置された像の引用です。
- ガルシア・ロブレスの近くに描かれた花はメキシコの国花であるダリアの花です。壁画家のカルロス・アルベルトさんによると、ここでは、「逆境の中でも咲く」というレジリエンスを表しています。
- 山口仙二さんの近くに、被爆後の復興の象徴となった広島の市花、キョウチクトウが描かれています。
- 青い空は、田中稔子さんが被爆後にがれきの中から見て希望をもらった空の景色、そして山下泰昭さんが思い描く平和の風景をイメージして描いたものです。
- 左下には、核廃絶を求める世界の市民が描かれています。プラカードの平和のマークは、本来「Nuclear Disarmament(核廃絶)」の頭文字「ND」に由来します。当初の意味を強調するため、「Nuclear Disarmament」の文字も併記されています。
- 左端の看板にある「核実験反対」の文字は、カルロス・アルベルトさんが、森滝市郎氏の座り込み運動に感銘を受け、写真で身に着けていた「たすき」の文字を、敬意をもって描いたものです。
- 右側の円柱は、広島空港開港記念の円柱のモニュメント「地球・一個の球体のために」と対話をする形で描かれています。岡本敦生氏によるこのモニュメントでは、円柱が世界の様々な都市の方向を指している構成となっており、壁画ではこれを「引用」する形で、複数の円柱が無数の折鶴に変化する様子を描き、世界各地から平和、核廃絶の願いのメッセージが届くことを表しています。

◆最後に◆

アドリーさんによると、壁画の制作過程の第1フェーズが、「情報収集とデザイン」、第2フェーズが、「壁画を描く過程」であり、この先は第3フェーズである「壁画のメッセージを伝え続ける」というのを、みんなで担っていくことになります。壁画の完成を見届けた、日本被団協の箕牧智之代表委員は「被爆者がこの世からいなくなつた後も、壁画が核兵器のない世界を訴え続ける力になってくれる」と言われました。私ども企画者および壁画家姉弟は、その願いが叶うことを心から願っております。(グティエレス一郎)